

意についての兩者の取扱ひ方が、著者の根本的な關心をなすものの如くである。

法稱については、その主著「量評釋」の第二章「量の成就」に於ける量の定義中に見られる「矛盾なき認識」(avisaṃvādi jñānam, avisaṃvādanam)と有目的的行爲(arthakriyā)とらふ重要な二概念をバーシヤの所論と考證して、その根據となる「有目的的行爲」を、更に arthakriyācakti を考證してヴァーツァーヤナの影響によるものと、法稱獨自のものとを分析され、その影響が語られる。

以下第三章・第四章に於いて、前來の考證に於ける結論ともいふべきものが、導出される。(一は文化史的に、一は論理的に。)今は本書が所謂外教に屬する論書の研究であつても、それが佛教研究にも極めて有益であることを紹介するために、佛教との關連のみを主として眺めて來た。もとより本研究の價值はそれのみでなく、印度哲學諸派思想研究に重要なことはいふを待たない。

(昭和三十一年十月、東京山喜房佛書林刊、洋A5五九二頁)(荷葉堅正)

“G. Tucci”

(1) THE SACRAL CHARACTER OF THE KINGS OF ANCIENT TIBET

From “EAST and WEST,”

(Year VI, N. 3-October 1955)

ISMEO, Via Merulana 248,

ROMA

(2) THE SYMBOLISM OF THE TEMPLES OF bsam yas

From “EAST and WEST,”

(Year VI, N. 4-January 1956)

これらの論文は、双方とも大部のものではないが、チベット學に關して、なに分にも多くの史料と該博な知識をもたれた教授の研究報告であるだけに、それぞれに興味ある問題を含んでゐる。

第一の論文は、前に同教授によつて出版せられた、チベット王の墓の研究や、系譜についての研究と照合すれば意義深い。

いふ迄もなく、佛教導入以前のチベット史は、きはめて無味乾燥に、しかも部

分的にしか知られてゐないのであるが、さうした中であつて、教授は重要と思はれるいくつかの問題をとらへ、史的研究の限界を守りつつ、それらによく肉を盛り血を通はしめてゐる。以下にその要點を記してみよう。

(イ) 古代チベットに於て、王の世嗣は十三になれば、王位についたといふ一つの事象が確實に考へられること。つまり「ボン人」が自然律法的に成人期に達した時、——その十三といふ數は、完成圓熟を意味してゐるのであつて、これは丁度イラン人に於ける十五、インドの傳統に於ける十六の數に相等しいもの——である。と云ふこと。

(ロ) それに附隨して、王位の後繼者がその適性を獲得するに従つて生ずる重大な事實、すなはち息子が王位繼承の資格を得るや、父は天國に送られる(虐殺して墓地に埋める)のであつて、これは有史時代に入つてもなほ、存続した傾向がある。いはゞ王なるものは、その祖先の靈が、無限に更新されて行く具象化の姿といふ意義を以て、この生界に出現したも

のなのである。そしてこの世に於ける靈の順回、無窮の青春のしるしたる十三の年齢が満る時に行はれ、同時に一つの明確なる裁斷が父を子より分離してしまふのである。

(イ)王は、(一)宗教的律法 *C'os*, (二)王の大權たる王座 *mngat'ang*, (三)地上世間の權力たる統治權 *Cab srid*, 及び(四)ヘルメット *dlu rmog*, の以上四つの大權を有するのであるが、實際上、王の權力はその中第二と第四とである。第一は僧職階級の特權とされ、第三の權能は重臣たちに委任せられてゐた。そしてシャーマン司祭、王大臣の三者はボンポ年代記によつて祝福されてゐる所謂「三巨頭」を形成してゐた。また太古に於ける威信の失墮を悲みつくも、昔の風習のかすかな光芒を今なほ傳へてをり、そして純歴史的事實としてでなく、チベットの太古の社會の概念とその理想の反映として、この王と僧侶と大臣とが三者一體となつて、一代ごとにすべて人物が改まるといふ方式の上に、今なほ顯著なる價值を置いてゐると云ふこと。

(二)王の神聖性について、及びその言語學的解釋、即ち王は定まつて *btsan po* または *btsad po* と呼ばれ、この *btsan* とは主として下界の權力を持つ王を意味してゐる。有史時代に入つてチベット王たちが、シナの帝王の如く、*Lha stras* と呼ばれてゐたやうに、太古に於ては *lde stras* つまり *lde* の息子と呼ばれてゐたらしい形跡がある。古代チベット語の *lde* は多分「神聖なる生體」を意味してゐるものであらうこと、もう一つ神聖體の名稱への接頭語 *O* に續いて *Older* (これは名前でなく稱號の様に思はれる) があり、これは *wa* と比較されるべきものであらうこと、またこの *wa* はシナ語の *王* にも關連がありさうで、*ti* は天主のこと、*Shang* 王朝時代の最高の神格であると同時に、王達の名稱ともされてゐたこと等。

(三)佛教的年代記やボンポ年代記の記述から、古代チベット王が祭禮に用ひた服裝、或は、その起源的意義は不明ながら、時々祭禮に與へられた理論的意義について、數場面の活人畫を示し、またかうい

ふ祭禮の起源的な意義は、文化の變遷と隣接國の文化の反映によつて、常に新しく解釋されて來たこと。同時にボンポのシャーマニズムの中心思想と、その理論的完成の一部は、明らかにイランに由來する思想があること。

(四)最後に今迄説き來つた論述のしめくゝりと、更に民族の社會組織及び、その民族理念の變遷等々を論じて本論文をむすんでゐる。

第二の論文は、1948年にラツサからの歸途、教授がサムエ大寺院を訪れて仔細に觀察した結果、サムエ寺院がチベット佛教の創立者とも呼ばれるべき、ティンデツエン王によつて建立せられたことはたしかであるといふこと。それがチベット古來のボン教と、漸進的に浸入し來つた佛教との間に於て、王宮が佛教に傾き、封建諸貴族はボン教の傳統を守るといふ、さういふ時代が時代であるだけに、サムエの建築構造は單に、物質的形象としてのみ看過することはできないとする觀點に立つて、ブトン史の中に畫かれた當時のチベット傳説の裏面をさぐり、

その中から種々な點に於て史的信頼性を確認しようとしてゐる。

ともかく、王や、パドマサンブハバの努力によつて完成されたこの寺院は、當時のチベット思想の上で、舊世界にかはつた新世界の思想を世に宣揚し、聖化し、佛教々理によつて象徴された世界を表現してゐた。そして佛教は今やこの雪深い國に根をおろし、また土地柄に不思議にふさはしい思想となり、同時にこの寺院の出現こそに於て、新しい宇宙觀は古きものゝ上に光被して、やがてそれらを同化し、チベットの全生命が展開して行く、その中心軸となつたものであることが強調される。そして教授によれば、チベットに佛教が弘まつたといふことは、「王の布告」(ティソンデツエン王主宰のもとに、インド及びチベット對シナの僧侶間に論争が行はれた時に由來する)の如きものゝ結果で、佛教がチベットを第二の故郷として決定したわけではなく、布告は佛教がチベットに見出した宗教的世界に對して、何等の重要性を持つてゐるものではない、と述べてゐる。

だが王の布告については、近時フランスの碩學 Paul Demiéville 教授が公けにされた、シナ史料「頓悟大乘正理決教」による勞作 *LE CONCILE DE LHASA* があり、その研究と考へ合せてみると面白いと思はれる。ともあれ當時のチベットに於て古來の宗教に對する新宗教が勝利を得る上に、シャーンティラクシタとか、パドマサンブハバのごとき、大厄拂師の介入を必要としたこと、同時にサムエの建立が佛教の基盤を確立するためのものばかりでなく、むしろ當時の事情から複雑な惡魔拂ひ的な意味を有する、長々しい義式を傳承する結果となつたことが誌され、最後に、一つの宇宙象徴が、古いもう一つのそれを打破つて得た勝利、それがサムエ寺院の象徴の中に新宇宙の改革として表現せられ、建立にもなつてなされた、禮拜式典によつてもり上つた力を通してよく往時の宗教を葬り、往時の教能力を無害のものとすることができたことを論じてゐる。

(高崎)

日本淨土教成立史の研究

井上光貞著

井上氏は戰後逸早く歴史學研究に「藤原時代の淨土教」なる畫期的な論文を発表され、藤原時代の貴族が何故に淨土教を受容したか、及び其の淨土教が如何なる形態をとつたかについて、藤原貴族の社會的基盤の上より論述されると共に、藤原淨土教が庶民社會を背景とする鎌倉時代の淨土教との異質を具體的な例證を擧げて論じられた。この事は藤原淨土教が鎌倉淨土教への移行形態として見られる原・家永博士と見解を異にするものであつた爲、家永博士より藤原時代と鎌倉時代を連絡する院政時代を無視すべきでない事を以つて藤原から鎌倉への質的飛超について反論がなされた。茲に於て井上氏は、更に院政時代の淨土教を調査されると共に、日本淨土教に關して其の後發表された論文に手を加え、此のたび日本淨土教成立史の研究として出版される事となつたものである。

本書の意圖するところは、序文に於て